

人権なら

2024年10月1日

第166号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

「部落問題の可視化」で討議

第15回奈良県「差別と人権」研究集会を開催

第15回奈良県「差別と人権」研究集会が9月7日、田原本青垣生涯学習センターであった＝写真。研究集会実行委員会が主催。350人が参加した。



古川友則・実行委員長、県地域創造部の毛利嘉晃・部長、磯城郡町村会長の高江啓史・田原本町長があいさつ。山下真・知事らの祝電が披露された。

清末愛砂さんが講演「ガザとどう向き合うのか」

記念講演は、清末愛砂・室蘭工業大学大学院教授が「パレスチナ・ガザで一体何が起きているのかーそれとどう向き合うのかー」と題し問題提起した＝写真。



清末さんは憲法学者。パレスチナにも深く関わっている。1948年のイスラエル建国は、シオニストがパレスチナの人々を追い出し、虐殺し、国をつくった。

その成り立ちは、日本が先住民アイヌの人々の土地を奪い、犠牲を強いてきたことと類似すると指摘。内なる植民地である北海道、沖縄から憲法を見ないと虐げられてきた人々の思いは見えないと語った。

内なる植民地、北海道、沖縄から憲法を見る

ガザ地区はイスラエル建国から75年以上も不当な占領下にある。2007年以降は「天井のない監獄」「強制収容所」と指摘される状態だ。パレスチナ人には自己決定権がない。一つの人種的集団が別の人種的集団に対して支配権を確立。イスラエルによる占領下

での非人道的なアパートヘイトが続いている。

パレスチナ人が居た痕跡を消そうとしている

昨年10月7日のハマースによる越境攻撃以降、ガザはイスラエル軍による激しい攻撃に晒されている。この状況は10月7日が引き起こしたのではない。長年、アパートヘイト下に置かれてきたことが始点なのだ。

越境攻撃はイスラエルに対する抵抗権、民族自決権の行使だ。一方、イスラエルの攻撃で死者は4万人を超える。約7割が子どもと女性だ。イスラエルは、パレスチナ人がそこに居た痕跡を消そうとしている。

「もはや私の知っているガザはない。それでも、私はガザの人々を見捨てない。必ず会いに行き、子どもたちと絵を描くと決めている」。市民レベルでできることはたくさんある。声を出し続けようと呼びかけた。

石元清英さんら4人がパネルディスカッション

パネルディスカッションは「部落・部落問題の可視化」をテーマに討議した。コーディネーターは石元清英さん(関西大学名誉教授)。

パネラーは満若勇咲さん(映画監督)、内田龍史さん(関西大学教授)、松田暢裕さん(御所市立葛小中学校教員)の3人＝写真。



松田さんは「教える側が『正しい答え』を持っていて、子どもたちが忖度して答えるのではなく、差別的な発言が出て、本音を出し合う中で考える授業にすることが大切」。満若さんは「メディアの中に部落差別を扱うことへの忌避意識がある。当事者性をもつ作り手も少ない」。内田さんは「部落や部落で暮らす人々に授業やフィールドワークを通じて出会うことだ。出会いとリアリティが誤解や偏見を崩していく」と提起した。

国内人権機関の創設が必要

三宅町人権講座で多原良子さんが「アイヌの今」

三宅町人権学習講座が9月17日、交流まちづくりセンターであった。

先住民族アイヌの声
実現！実行委員会
の多原良子さんと、



出原昌志さんが「アイヌの今」を話。40人が参加した。

多原さんは、アイヌ民族は18世紀、松前藩から奴隷同様の扱いを受けた。女性は和人の妻、妾にされ、家庭崩壊が横行した。その後、明治政府に統合され、搾取と同化政策で苦難の歴史を歩んだ。女性は民族差別とジェンダー差別の複合的被害を受け続けたと。

杉田水脈の誹謗中傷に法務局が人権侵犯と

2016年の国連女性差別撤廃委員会に民族衣装を着て出席した。それを杉田水脈が「コスプレおばさん登場」と誹謗中傷。札幌法務局は昨年、これを人権侵犯と認定。ヘイトスピーチを規制する社会規範を初めて示した。アイヌ民族の人権擁護へ包括的差別禁止法、独立した人権機関の創設が必要だと訴えた。



アイヌの権利回復は国家を支える和人の問題

出原さんは、国はアイヌに対する植民地政策の矛盾・責任を人種主義・優性思想にすり替える。生存競争に敗れた滅びゆく民族、劣等民族との考えだと。

人類学者は「人体標本」として大量のアイヌの遺骨を盗掘。それは大和民族の優秀さと、アイヌへの差別思想を創るためだった。なぜ被害者が遺骨返還訴訟をしなければならないのか、と語った。

貧困、急激な人口減少、同化強制が続く。アイヌの権利回復は国家の成り立ちを問う問題であり、この社会・国家を支える和人の問題だと強調した。

アイヌ民族は全国に居住する。自治体の人権推進

指針・基本計画でアイヌ施策推進法の記述が欠落している例もある。正しい歴史認識の定着を、と訴えた。

邑久光明園で紙芝居

式下中学校生徒が同園を訪れ、入所者に披露

式下中学校「紙芝居をつくる会」の生徒たちが9月21日、岡山県にあるハンセン病療養所、邑久光明園

を訪問。入所者に創作紙芝居を披露した＝写真。



紙芝居は「忍性さん・笑顔のお坊さん」と、「ふる里の誇り・世阿弥」の2点。生徒たちは三宅町で生誕した忍性と、川西町で「能」を完成させた世阿弥の功績について地域学習で学び、紙芝居として仕上げた。

「紙芝居をつくる会」には20余人の生徒が所属。この日は5人が訪問した。披露のあと、入所者と交流。作品はみんなが描いたので、忍性も世阿弥もどれ一つとして同じ顔をしていないなどと説明した＝写真。

地域学習、人権学習に力点を置く式下中

今回の取り組みは、光明園の学芸員が「架け橋の会」が4月に催した北山十八間戸フィールドワークに参加した折、生徒たちの紙芝居活動を知り実現した。



入所者は「紙芝居を観るのは子どものとき以来。優しい感性で描かれていて感激した」「北山には行ったことがあるけど、忍性のことを知れて良かった」と。

生徒たちは「療養所を訪問し、紙芝居を披露できてとても良かった」「紙芝居の披露を通して療養所の皆様との繋がりが実感できた」などと感想を述べた。

式下中では、忍性を教材にした地域学習を進めている。それを糸口にハンセン病についても学習している。その学習時間は16時間にも及ぶ。

生徒たちは忍性を「ふる里の誇り」として感じつつ、ハンセン病問題への認識を人権学習で深めている。

大人も子どももブクブク

シャボン玉アートお絵描きあそびを楽しむ

「みんなであそぼう会」を8月24日、三宅町あざさ苑で行いました。今回は「♪やよちゃんのつくってたのしもう」です。石井弥生さん(やよちゃん)に講師として来てもらい、シャボン玉アートお絵描きあそびをしました＝写真。



参加者は小学生4・中学生5・高校生1・大学生1・子どもサポーターとして大人10の計21人でした。いつもより、少ない参加人数でしたが、のんびりとシャボン玉でブクブクたのしいお絵描きタイムとなりました。

そのあと、ものづくりをしたい人たちは、くるみボタンのマグネットを作り、小さな布切れと、つまようじでかわいいコサージュを作りました。ものづくりをしない人たちは、それぞれが好きなことをして過ごしました。

子どもたちのアイデアに驚いたり、感心したり

ものづくりの様子を見て、自分もやってみようかなあと、あとから参加する人もいました。今回は大人の参加が多く、シャボン玉ブクブクを一緒に楽しみました。



子どもたちとは初対面だった人も、子どもたちのアイデアに驚いたり、感心したり、教えてもらったり、教えてあげたり、自然にいろんな会話が飛び交って、ほっこりとした時間が流れました。

ものづくりは一人で楽しむのも良いけれど、いろんな人と隣り合わせになって、道具を貸し合ったり、作ったものを見せ合ったり、参考にしたり、自分の作品をほめてもらったり、人の作品を良いなあと思って伝えたり、自然な雰囲気の中で交流することができます。

大人も子どもたちと同じ目線になって、楽しみ、ホッとしていたようでした。あっという間に3時間が過ぎました。時間を忘れて、楽しいひとときを共有できました。

(子どもの居場所づくりをつくろう会・山本薫)

旭ヶ丘小闘争記念碑を建立

45年前の差別教育事件糾弾闘争を記念し

「旭ヶ丘小学校差別教育事件糾弾闘争記念碑 人の世に光あれ、人間に熱あれ」の除幕式が9月8日、吉野郡大淀町比曾であった＝写真。



記念碑は、部落解放同盟比曾支部が建立した。場所は西照寺の向かいにある故國中憲治さんの旧宅跡。除幕式では、全員が碑の前で黙とうしたあと、川崎上(たかし)・支部長がお礼のことばを述べた。仲川雅博・県連書記次長は「現地闘争本部」に寝泊まりして闘いを進めたと懐かしく当時を振り返った。同盟休校に参加した「子ども会」の代表もあいさつした。

闘いのきっかけは1979年12月に5年生の児童が差別発言を受けたこと。比曾支部、父母の会は差別発言への対応と、同和教育の推進を求めて決起。1981年1月、47日間の「同盟休校」にまで発展した。

12月15日に糾弾闘争記念集会の開催も

除幕式のあと、旭ヶ丘総合センターに移動し、懇親会＝写真。会場には、当時の写真集や史料記録のほか、父母の会や比曾解放子ども会の旗が展示された。奈良テレビが放映した映像も流された。



同盟休校を闘った7人と、父母の会の5人も参加。父母の会の代表は「闘いは44年前。みんなもう80歳を超えた。旭ヶ丘小も更地になり、何もかも消えてしまうのかと思っていた。こんなプロジェクトが立ち上がり、心から嬉しく思う」と。会場は共感の輪に包まれた。

12月15日には「旭ヶ丘小学校教育差別事件糾弾闘争比曾支部記念集会」を準備している。部落解放運動が大きく揺れ続ける中、45年という時間を振り返る貴重な集会になると思われる。

11月に第30回生き生き交流祭

「子どもたちの人権と戦争を考えよう」テーマに

11月10日に開催する第30回「生き生き交流祭」の第1回実行委員会が9月11日、三宅町あざさ苑であった。写真は今年の交流祭オープニング。



交流祭は子どもから大人までみんなで楽しみながら三宅町に人権文化を育んできた歴史を有している。1991年に部落解放交流祭として始まり、多くの人たちの情熱と協力と理解によって作り上げられてきた。

ことしは「子ども達の人権と戦争を考えよう！」がテーマ。今現在、戦争によって奪われている子どもたちの人権を考える。そして、未来をつくる子どもたちに交流祭を引き継いでいくため、取り組むこととしている。

戦争と人権を考える大切さを参加者で共有

去年は、ウクライナから天理大学に避難している留

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

袴田巖さんに無罪判決が出た。当然の決定だ。権力は58年もの人生の大半を剥奪。人権を蹂躪してきた。その罪は重い。長い闘いを支え続けた姉秀子さん、弁護団、支援者に頭が下がる。死刑を求刑し続けた検察。冷酷かつ残忍な犯罪集団と言える。権力は事件を捏造。冤罪をでっち上げ、自らの権威と体制の維持を図る。無実が証明されても誰一人、責任を取らず、謝罪さえもしない。1980年に死刑判決を出し、袴田さんを死刑囚としてきた裁判官も同じだ。再審請求中に死刑を執行された人もいる。冤罪が晴れても社会復帰は至難の業が実状だ。死刑制度を廃止し、狭山など冤罪事件の再審開始を直ちに行うべきだ。再審法を改正し、無辜(むこ)の人を救うべきときだ。

学生を迎え、戦争と人権を考えることの大切さを参加者が共有するイベントとして取り組むことができた。

しかし、未だに、ロシアによる不合理かつ残虐きわまるウクライナ侵攻で被害を被っている人たちの状況は変わっていない。さらに、イスラエルによるパレスチナへの攻撃も続いている。多くの市民が終わりのない武力による制圧行為で犠牲になり、命を奪われている現状がある。このため、ことしも昨年にも増して戦争と人権の問題を考えるイベントにしたい、としている。

数々の演舞で大盛り上がり

50回目を迎えた大正エイサー祭り

第50回エイサー祭りが9月22日、大正区内であった。主催はがじまるの会・エイサー祭り実行委員会。

1975年に「第1回沖縄青年の祭り」として始まり、今回、第50回を迎えた。

この日、早朝から強風雨に見舞われ、会場を大正区役所ホールに急きよ、変更。大



正沖縄子どもエイサー団の演舞やライブ、各地から参加した団体のエイサーが屋内で繰り広げられた。

午後3時ごろには雨も止み、当初予定していた会場の千島公園グラウンドを整備し、移動。引き続き、エイサーの演舞を行った。沖縄から参加した、「琉球風車(カジマヤー)」「名桜エイサー」など、グラウンドでの演舞は迫力満点。大勢の観客も盛り上がり、時を忘れて見入っていた。祭りは時間をオーバーして終了。感動の余韻がいつまでも残るエイサー祭りとなった。

ニュースレター「人権なら」

発行：NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail: info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/